

バリエーションルート歩く「自由」

TENSION 井上好司

地形図の等高線の模様を眺めつつ自分が歩けそうなルートを幾通りか探し出し、実際に現地へ行って今度は目の前の地形を眺め歩きやすそうなルートを思い描き、地図を見て描いたルートと比べつつ山を歩くのが好きだ。

いわゆる一般ルートではない(山と高原地図でいう破線や実線のない)ルートのすべてをバリエーションルートと呼ぶこともあるようだが、そんなルートの中にはネット上に山行記録がたくさん上がっていたり、残置プロテクションがルートを示しているようなルートもある。それらは本来のバリエーションルートとは違った楽しみ方をするルートなのだろう。

本来のバリエーションルートを好む者なら、自分が読んで面白かった推理小説の犯人やアリバイ工作を後で読む人の為に懇切丁寧に説明するような山行記録を残すことはしないし、そんな他人の山行記録は読まない。後で書き残すとすればその場で何を感じどんなことに気づきそれを基にどう考えどう判断したかを振り返る、そんな備忘録的な記録になるだろう。そんな記録なら読みたいが書かれていないのかオープンにされていないのかなかなか見ない。

僕が初めて入った頃の芦生の森には枝にルートを示すテープはなかった。例えあっても次に行ったら誰かが外していた。たまに谷の分岐にケルンのようなものがあつたが次に行くとそれもなくなっている。自分の後でこのバリエーションを楽しんで歩く人への配慮なのだろう。自分が歩いた後の痕跡は可能な限り残さないようにする。それがこの森を歩く者のエチケットだった。この森はルーファイのできないようなハイカーを拒絶しているようで、でも自分は芦生の森を歩くことを許され受け入れられていると感じ、誇らしい思いとこの森を守る責任のようなものを抱くようになった。

芦生の森は京都大学の研究林である為天然林であることを維持する必要があるため一般ハイカーを拒絶する性質があつた。でも事前に入林申請をすれば京大は特別な実験などを行っている場所を除きほとんどのルートの許可をくれた。整備されたハイキング道を作らなかつたことで僕のような趣味の者にはとても魅力的な山域となつた。

なんという言葉で「読図」と訳したのであろう？英語で言うなら「navigation」 or 「route finding」と思われるが、山岳用語の「読図」という言葉が日本の山屋にナビゲーションのできない、ルートファインディングの苦手な人をたくさん作ってしまうことになつたと僕は思っている。読図講習会・読図山行をするたびにその思いは確信に変わる。「山岳地形と読図」というタイトルはヤマケイ出版の登山技術全書から取つたものだがこの著者も僕と同じ思いなのだろうとこのタイトルの付け方から読み取れる。

読図を学ぼうとする人は一生懸命地図を見る。当然だ。地図読みの学習に来ているのだ

から。地図を読むことは間違いなく大切なことだが、それと同等に地形を読むことも大切であることを読図講習会では教えない。冒頭にも触れたが地図を見てどんな地形かを想像し歩きやすそうなルートを探すことが重要な事であり、またそれと同等に実際の地形を見て歩きやすそうなルート（弱点ルート）を探すこと、また目の前の地形が等高線でどのような模様に描かれるかをイメージすることが重要なのだ。

それができれば地形が見える状況である限り本来のバリエーションルートを歩くことはそれほど難しくはない。無雪期の芦生の森はシカの食害の為ほとんど下草が残ってなく地肌がむき出しで成長した樹木とコケ類・シダ類しか生えていない為藪漕ぎの必要がない。バリエーション山行には最も好都合な山域なのである。基本的に尾根を歩くが時にはわざわざ谷を歩く。谷は登り、尾根は下りか縦走が楽しい。分岐があってどちらを選択するか自由があるから。いわゆる一般登山道には自由がない。ルートがあらかじめ決められていてその通りなぞって歩かなければならないから。

バリエーションを歩くことの面白さは自由にルートを選択できる事だ。人の後について歩いても意味がない。それはバリエーションを歩いたことにならない。パーティでバリエーションを歩くなら先頭を交代しながら歩かなければならない。

バリエーションルートを歩くことの「自由」についてどうもうまく表現できなくて困っていたらネット上で素敵な文章に出会った。これぞ僕が言いたい「自由」なのです。無断掲載ですが公開されている文章だしリスpekトの気持を込めて抜粋ですが転載させて頂く。

『「ここはどこだ？」「行くか、戻るか？」。ずっと自分自身との問答の繰り返しです。それでも当時、私が山に夢中になったのは、そこで「自由」を感じたからです。山で吸った「自由」の空気がうまかった。たった一人、自分で決める。大自然の中、何をしてもいい。また逆に、何もできない、怖ろしい世界。夜の闇と小さな死の予感。それら全てを含めた「自由」が山にはありました。

冬は重いドームテントを持たず、雪で作るイグルー（かまくら）や雪洞を使います。夏はストーブ（炊事用コンロ）を持たず、流木で焚き火して、炊事を全てまかないます。山に持ち込む荷物を減らして身軽に山のものを使って凌ぎ、自由に山を渡り歩くやり方です。自由とは free。英語と同じく助け無し（help free）、道具無し（equipment free）のことでした。人がつけた印の無い山を、誰かの助け無しに進む自由な山登りに、登山本来の喜びがありました。

きみも近い未来、家を出て、高校を出て、どこか新しい世界へ行くとします。その行き先は「自由」であるのだから、自分で全部、何から何までやらなくてはならないでしょう。その「自由」は家庭や学校では体験できません。けれどもひとりで雪山に登ると、孤独な自由を通して、少しの自信と、将来はもっと遠くに行けるんだという小さな手ごたえや夢が花開くのです。山登りは生きるすべての技術を身につける行いです。行き先も、日程も、持ち物も、目的も、ペースも、全部自分で決めてこそその「自由」です。』